

**令和8年度
教育に関する事務の管理
及び執行の状況の点検
及び評価
(令和7年度分)
報告書**

**令和8年10月
千代田区教育委員会**

令和 8 年度 教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検 及び評価(令和 7 年度分)報告書

目 次

1	はじめに	1
2	点検評価の対象及び実施方法	2
3	有識者意見	11
4	各事業についての評価及び今後の取組み.....	27
参考 資料 1 教育委員会の活動.....		32
資料 2 教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価 実施要綱		44
資料 3 有識者会議資料（第 1 回）		47
資料 4 有識者会議資料（第 2 回）		53
資料 5 千代田区第 4 次基本構想.....		70
資料 6 千代田区子育て・教育ビジョン.....		72

地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和 31 年法律第 162 号）

（ 教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価等 ）

第26条 教育委員会は、毎年、その権限に属する事務（前条第 1 項の規定により教育長に委任された事務その他教育長の権限に属する事務（同条第 4 項の規定により事務局職員等に委任された事務を含む。）を含む。）の管理及び執行の状況について点検及び評価を行い、その結果に関する報告書を作成し、これを議会に提出するとともに、公表しなければならない。

2 教育委員会は、前項の点検及び評価を行うに当たっては、教育に関し学識経験を有する者の知見の活用を図るものとする。

1 はじめに

地方教育行政の組織及び運営に関する法律第26条の規定に基づき、教育委員会は、毎年、その権限に属する事務の管理及び執行の状況について、教育に関し学識経験を有する者の知見の活用を図りつつ、点検及び評価を行い、その結果に関する報告書を作成し、議会に提出するとともに、公表しなければならないこととされている。

本報告書は、同法の規定に基づき、千代田区教育委員会が令和7年度の事務の管理及び執行状況について、点検及び評価を行ったものである。

本年度は、地方自治法第233条第5項に基づいて区が作成する「主要施策の成果」に掲載されているもののうちから選択した施策及び事業並びに、客観的な根拠に基づいた点検・評価を実施するため、定量的な指標を設けた項目に関する施策及び事業を点検及び評価の対象とした。

今回の点検・評価を踏まえ、より一層効果的で区民に信頼される教育行政を推進していく。

2 点検・評価の対象及び実施方法

(1) 点検・評価対象事業の選定

令和7年度主要施策の成果（令和8年9月発行）に掲載された教育委員会所管23事業の中で、社会経済情勢の変化を踏まえて今後の方向性を検討する必要がある代表的な事業について選定する。

また、主要な事務事業に対して定量的な指標を設け、客観的な根拠に基づいたより効率的かつ効果的な点検及び評価を実施し、施策全体の取組みの効果検証や分析等を行う。

(2) 対象事業

ア 主要施策の成果から選定した事業

(ア) 子どもの権利推進

こども基本法の施行を踏まえ、子どもの権利の普及啓発及び子ども等の意見反映の取組を推進するため、子どもや保護者を対象としたアンケート及び小学生向けワークショップを実施し、子どもたちの区政への関心向上に取り組んでいる。

【選定理由】ワークショップやアンケートの結果をA I分析した結果を踏まえ、「子どもの居場所」創出のための取組を含めた、当区としての今後の方向性について検討するため。

有識者会議資料（第1回）：本誌P47

(イ) I C T学校教育システムの推進

新たな時代を生き抜く人材の育成に向け、教育施設へのI C T環境を整備し、教育活動や校務に活用することで教職員の働き方改革を進めるとともに、「ちよだりテラシー教育」を通じて、情報活用能力や情報モラル、主体的に学ぶ力の育成を図っている。

【選定理由】九段中等教育学校において実施している先進事例及びシステムリプレイスに向けた検討実績や「ちよだりテラシー教育」の実施状況について点検・評価するため。

有識者会議資料（第2回）：本誌P53

イ 定量的指標を用いての点検及び評価

(ア) 全国学力・学習状況調査の正答率

「千代田区立学校指導改善プラン」を各校で策定・実施した結果、調査結果は全国平均及び東京都平均を概ね上回る水準で推移しているが、学年進行に伴う学力の定着において、課題が見受けられる状況である。

【選定理由】教育の成果を測る拠り所として、全国学力・学習状況調査の正答率を確認する必要があるため。

(イ) 千代田区立学校の体力・運動能力調査における体力合計点平均値

子どもたちの基礎体力の向上を目指し、体育授業の充実や運動習慣の定着に向けた取組を推進しているが、思春期の体力低下や運動習慣の定着に課題が見受けられる状況である。

【選定理由】体育教育の成果を測る拠り所として、全国体力・運動能力、運動習慣等調査の体力合計点平均値を確認する必要があるため。

(3) 点検評価の実施方法

教育に関し学識経験を有する者の中から、教育委員会が委嘱する「点検及び評価に関する有識者」の知見の活用を図りながら、教育委員会において点検評価を行う。その結果を取りまとめ、報告書を作成し、議会に提出するとともに、ホームページ等により区民に公表するものとする。

ア 点検及び評価に関する有識者 名簿

氏 名	役 職
上岡 学	武蔵野大学副学長
清水 哲也	元多摩市教育長
条原 淳子	日本女子大学家政学部児童学科特任教授
高橋 純	東京学芸大学教育学部教授

イ 有識者会議の開催状況

	開催年月日・会場	概 要
第 1 回	令和8年6月8日 会場：教育委員会室	1. 令和8年度 実施方針等の説明 2. 子どもの権利推進 3. 定量的指標を用いた項目について (1) 全国学力・学習状況調査の正答率 (2) 千代田区立学校の体力・運動能力調査における体力合計点平均値 4. その他
第 2 回	令和8年6月22日 会場：千代田区立 九段中等教育学校	1. I C T学校教育システムの推進 (1) ちよだりテラシー教育 (2) 九段中等教育学校におけるI C T教育 2. その他

2 子どもの権利推進【拡充】

第4次基本構想のめざすべき姿等

すべての子どもたちの個性や意思が尊重され大切に育まれながら、すくすくと成長しています。

将来像に向けた方向性

多様な人々と関わり、未来を切り拓き、たくましく生きる人材を育てていくことが必要である。

(関連する主な分野別計画：千代田区子育て・教育ビジョン)

事業概要	内容 令和5年4月にこども基本法が施行されたことを踏まえ、子どもの権利の普及啓発、子ども等の意見聴取や政策への反映に係る取組みをさらに推進していく必要があります。 令和7年度は、区内在住の生徒等や保護者を対象としたアンケートの実施により、区が子ども・保護者に広く情報を発信する方法や、子どもが区に思いを伝えられる方法等について検討します。 また、区内在住の小学生を対象にワークショップを実施し、子どもたちが区政に対するアイデアを出し、意見表明をしてもらう機会を設け、子どもの区政に対する興味関心の向上を図ります。		
事業費	予算現額	決算額	執行率
	9,950,000円	9,512,815円	95.6%
事業実績	○令和7年度実績 子ども・保護者向けのアンケート調査及びワークショップを実施し、子どもの意見表明の機会を設けるとともに、子どもの意見聴取及び政策反映に関する基礎的なデータの蓄積を図り、課題や方向性を整理しました。また、併せて職員研修を行い、職員の理解促進を図りました。 (1) アンケート調査の実施 調査期間：令和7年6月20日～7月19日 調査対象：【子ども】小学校4年生から高校生世代の区民 【保護者】4歳～高校生世代の子どもがいる保護者 調査回答：【子ども】671件、【保護者】1,020件 (2) 子どもワークショップの実施 実施回数：2回 参加者数：計60名 (3) 職員研修 実施回数：2回 参加者数：計95名		
令和9年度予算への対応 実績を踏まえた評価・課題	今後さらに子ども等の意見聴取や政策への反映に係る取組みを推進していくためには、区としての統一的な考え方や指針の整理に加え、実践的なノウハウの共有・蓄積が必要です。 令和8年度は、これらの課題を踏まえ、引き続き子どもワークショップを実施するとともに、区独自のガイドラインの策定や、職員によるサポートメンバー会議の運営、職員研修を一体的に実施し、子どもへの意見聴取から政策反映までを担う職員の実践力向上を図ります。 令和9年度は、令和8年度に策定するガイドラインの定着を図るとともに、人材育成の推進及び意見聴取の機会を継続的に確保することで、子どもの意見の政策反映を着実に推進するための運用体制の充実を図ります。		
所管課 子ども部 子ども総務課		決算参考書 136頁	R7予算の概要 111頁

11 ICT学校教育システムの推進【拡充】

第4次基本構想のめざすべき姿等

すべての子どもたちの個性や意思が尊重され大切に育まれながら、すくすくと成長しています。

将来像に向けた方向性

多様な人々と関わり、未来を切り拓き、たくましく生きる人材を育てていくことが必要である。

(関連する主な分野別計画：千代田区子育て・教育ビジョン)

事業概要	内容	区は、新たな時代を生き抜く人材の育成に向け、教育施設へのICT環境を整備し、教育活動で活用するほか、校務にも活用することで教職員の働き方改革を進めています。 令和7年度は、令和6年度に文部科学省の高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）の採択校となった九段中等教育学校において、区立校のモデルとして、デジタル等成長分野を支える人材育成の充実を図るための環境整備と、探究を軸とした数理・データサイエンス・AIなどを含むSTEAM教育※の学習を取り入れたプログラム学習を実施します。 ※STEAM教育：科学（Science）、技術（Technology）、工学（Engineering）、芸術・リベラルアーツ（Arts）、数学（Mathematics）の5つの領域を対象とした理数教育に創造性教育を加えた教育理念。知る（探究）とつくる（創造）のサイクルを生み出す、分野横断的な教育		
事業費	予算現額	決算額	執行率	
	376,822,000円	351,526,798円	93.3%	
事業実績	○令和7年度実績 （1）安定的かつ高速な通信環境整備と最先端の学びの場の提供 ネットワーク機器の更新のほか、PC・LL教室の環境整備と合わせて実習用端末を導入し、ICT環境の整備充実を図りました。 （2）DXハイスクール事業の推進 事業指定校として、実習機器の高性能カメラやセンサーのほか、デジタル測定器、特殊プリンター等を導入し、探究活動を軸としたSTEAM教育の学習に活用しました。また、指定校同士での情報交換や交流を図り、授業に生かすなどの取組みを実践しました。 （3）区立小学校への展開 区立小学校の5、6年生を対象にドローンや3Dプリンターを活用した体験講座の実施や生成AIの利活用など先進的に行ってきた取組みを展開しました。 （4）九段中等教育学校教員と区立小・中学校教員との交流 年4回実施している情報教育主任会において、九段中等教育学校における生成AIの利活用等、ICT学校教育に関する情報交換を行いました。			
実績を踏まえた評価・課題 令和8年度の取組状況 令和9年度予算への対応	デジタル等成長分野を支える人材育成の充実を図るためには、ICT環境の整備と探究を軸としたSTEAM教育の充実が必要です。 令和9年度は、令和8年度に引き続き、生成AIの利活用の機会創出と区立小・中学校へと取組みを展開し、文理横断的な探究活動を推進していきます。また、情報の授業の履修率、探究コンテストなどへの応募数、大学進学実績などの向上をめざし、取組みを進めます。			
所管課 子ども部 九段中等教育学校経営企画室		決算参考書	144頁	R7予算の概要 114頁

定量的指標	① 全国学力・学習状況調査の正答率		
所管課	指導課		
定量的指標の出典先	全国学力・学習状況調査（千代田区）		
めざすべき姿	一人ひとりに応じた学習課題を把握し、個別最適な学習内容の提供や多様な他者との協働を充実させることにより、学習内容の確実な定着を図る。全ての子どもたち一人ひとりの可能性が最大限伸ばされ、新しい時代に必要な資質・能力を身に付ける。		
目標設定	千代田区立学校の全国学力・学習状況調査の正答率が全国平均及び東京都平均を上回る状態を維持するとともに、基礎学力の定着が十分ではない層へアプローチすることで学力の底上げを図る。		
千代田区子育て教育ビジョンへの掲載	あり	基本的方向性	全ての子どもに確かな学びを育む教育の推進
	P.30-31	施策の方向性	基礎学力の定着

実績値の推移等

◆ 小学校6年生

国語	R4	R5	R6	R7
千代田区	76	77	79	75
東京都	69	69	70	70
全国	65.6	67.2	67.7	66.8

算数	R4	R5	R6	R7
千代田区	77	79	79	74
東京都	67	67	68	64
全国	63.2	62.5	63.4	58

◆ 中学校3年生

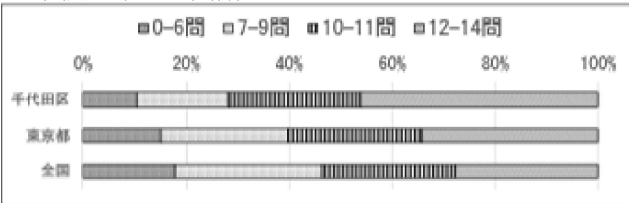
国語	R4	R5	R6	R7
千代田区	74	80	71	65
東京都	70	72	61	57
全国	69	69.8	58.1	54.3

数学	R4	R5	R6	R7
千代田区	63	63	71	67
東京都	54	54	57	53
全国	51.4	51	52.5	48.3

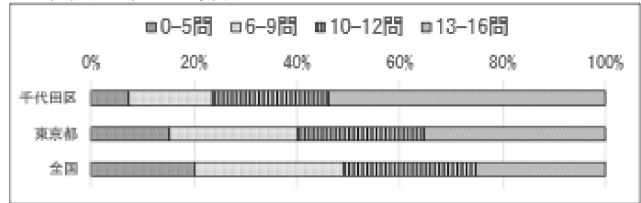
※表の数値は平均正答率（％）を示す

□ 令和7年度 正当数ごとの層分布（全国四分位）

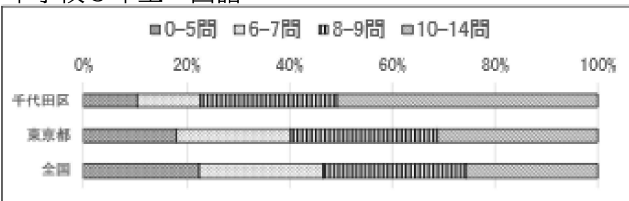
小学校6年生 国語



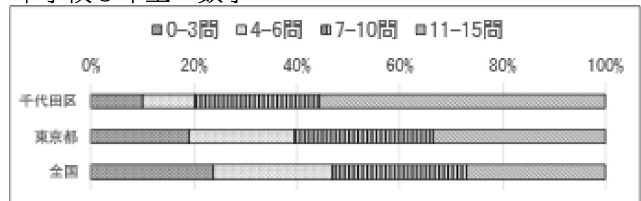
小学校6年生 算数



中学校3年生 国語



中学校3年生 数学



現状分析（背景・課題等）

千代田区立学校では、すべての児童生徒に確かな学びを保障することを目指し、「全国学力・学習状況調査」（以下「全国調査」）を教育成果を測る重要な指標として活用している。令和４年度から令和７年度までの結果を見ると、小学校６年生・中学校３年生ともに、国語・算数（数学）の平均正答率は全国および東京都の平均を上回っており、基礎的な知識・技能の定着について一定の成果が確認できる。

特に小学校６年生では、国語・算数ともに高い水準を継続しており、学習内容の理解が着実に進んでいることがうかがえる。一方、中学校３年生では、全国・都平均を上回るものの年度による変動が大きく、学習内容の高度化に伴い、基礎の未定着が後の学年で顕在化している可能性が示唆される。

さらに、全国四分位による層分布を分析すると、千代田区は全国および東京都と比較して上位層の割合が高く、下位層の割合が少ないという特徴が見られる。これは、区としての教育施策の成果が一定程度表れていることを示すものである。一方で、下位層が存在しないわけではなく、一定数の児童生徒が基礎的な学習内容の定着に課題を抱えていることも明らかとなった。

このことから、学力の高い層をさらに伸ばす取組を継続するとともに、下位層に対しては個別最適な学習活動による丁寧なケアを行い、学力の底上げを図る必要がある。また、全国調査で重視される思考力・判断力・表現力の育成や、学習意欲・自己肯定感といった学力以外の側面への支援も引き続き重要である。多面的なデータを活用しながら、児童・生徒一人ひとりの学びを支える教育活動の改善を一層推進していくことが求められる。

関連する施策

事業名	所管課	概要・主な取り組み
達成度調査	指導課	学習指導要領において身に付けることが求められている必修教科の内容について、児童・生徒一人ひとりの学力の達成度と傾向、学力と生活実態との相関関係を調査することにより、今後の指導方法の改善に資する。
学びに向かう力等に関する意識調査（東京都教育委員会にて実施）	指導課	児童・生徒の学びに向かう力等に関する意識及び学校の指導方法等を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証しその改善を図るとともに、各学校の教育指導の充実や組織的な授業改善等に役立てる。
指導改善プラン	指導課	各学校が「全国学力・学習状況調査」や達成度調査等の結果に基づき、教育活動の成果と課題についての検証を行い、学力向上を図るための具体的な「指導改善プラン」を作成する。作成した「指導改善プラン」を各学校ホームページにおいて公表する。

令和７年度実施施策の成果及び今後の施策の方向性

千代田区では、「全国学力・学習状況調査」や達成度調査等の結果分析を基に、各校が自校の課題を明確化し、改善に向けた取組を体系的に進められるよう、「千代田区立学校指導改善プラン」の策定・実施を推進してきた。令和７年度においても、このプランを活用した学校現場での取組が着実に進展している。まず、各校が調査結果をもとに教育活動を振り返ることで、課題の可視化が進み、教員一人ひとりの授業改善への意識が高まった。校内研究や研修においても、学習指導の質向上に向けた協議が活性化し、学校全体として授業改善に取り組む姿勢が強まっている。具体的な改善策としては、少人数指導や補充学習の充実、単元ごとの習熟度確認テストの実施、授業研究を通じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実などが挙げられる。これらの取組が、全国平均および東京都平均を上回る正答率を維持することに寄与するものと考えられる。

今後は、「全国学力・学習状況調査」や達成度調査の結果に加え、児童・生徒の意識調査の結果を分析することで、教育施策の効果をより多面的かつ立体的に把握していく。これらのデータに基づき、必要に応じて指導方法や支援策の見直し・強化を図るとともに、「千代田区立学校指導改善プラン」を活用した各校のPDCAサイクルによる授業改善を促進する。

さらに、学力に関するデータ分析の充実を図り、学校全体としての授業力向上と学力の底上げを目指す。特に、全国四分位の分析から明らかになったように、千代田区は上位層が多い一方で、一定数存在する下位層への丁寧な支援が引き続き重要である。個別最適な学びへの支援の充実を通じて、すべての児童・生徒の学びを確実に支える教育環境の整備を進めていく。

定量的指標	② 千代田区立学校の体力・運動能力調査における体力合計点平均値		
所管課	指導課		
定量的指標の出典先	全国体力・運動能力、運動習慣等調査（千代田区）		
めざすべき姿	子どもたちの体力状況を把握・分析し、体力向上にかかわる取組の成果と課題を検証してその改善を行うとともに、自ら体力を高めていく習慣を身に付け、生涯にわたり心身の健康を保持増進することができる資質・能力を育むため、多様な運動への意欲と体力の向上を目指す。		
目標設定	千代田区立学校の体力・運動能力調査における体力合計点平均値（全国平均を50とした比較）が全国平均を上回る。		
千代田区子育て教育ビジョンへの掲載	あり	基本的方向性	健康で安全に生活する力を育む教育の推進
	P. 32	施策の方向性	基礎体力の向上

実績値の推移等

◆ 小学校5年生

男子	R4	R5	R6	R7
千代田区	51.2	51.2	50.8	51.9
東京都	50.3	50.0	50.1	49.9
全国	50.0	50.0	50.0	50.0

女子	R4	R5	R6	R7
千代田区	51.5	51.7	49.9	50.7
東京都	50.1	49.8	49.9	49.7
全国	50.0	50.0	50.0	50.0

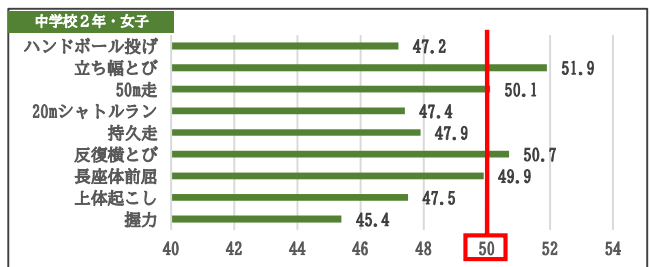
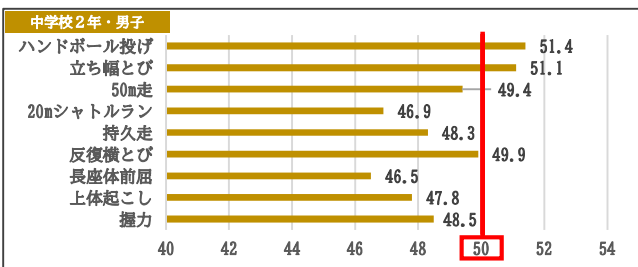
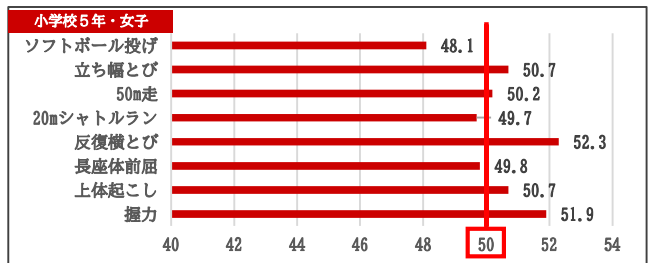
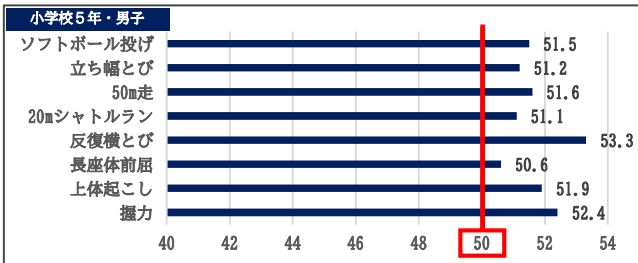
◆ 中学校2年生

男子	R4	R5	R6	R7
千代田区	49.4	49.0	49.6	48.3
東京都	49.1	49.3	49.2	49.2
全国	50.0	50.0	50.0	50.0

女子	R4	R5	R6	R7
千代田区	47.4	49.8	49.3	48.5
東京都	49.3	49.4	49.2	49.4
全国	50.0	50.0	50.0	50.0

※千代田区において全国平均（50）を上回る年度については、下回る年度については、にて示す。

□ 令和7年度 実技調査項目の結果（実技調査T得点）



現状分析（背景・課題等）

千代田区立学校では、子どもたちの基礎体力の向上を重視し、体育・健康教育の成果を客観的に把握する手段として、「全国体力・運動能力、運動習慣等調査（以下『全国体力調査』という）」を活用してきた。

令和4年度から令和7年度にかけての「全国体力調査」の結果を見ると、本区の小学校5年生男子及び女子に関しては、体力合計点について概ね全国平均を上回るか、近い水準を維持している。特に、小学校5年生男子については、4年間を通して全国平均を上回っており、一定の成果が見られる。

一方で、経年変化に注目すると、中学校段階においては男女とも全国平均を下回る傾向が続いており、日常生活の大きな変化に伴い、運動習慣の定着が難しくなる時期であることが伺える。小学校から中学校への進学に伴い、外遊びの機会が減少したり、高等学校への進学等に向け学習に時間を割いたりすることが、運動機会の減少や生活リズムの変化に影響していると考えられる。

こうした状況を踏まえ、子どもたちが健康で安全に生活できる力を育むため、発達段階に応じたきめ細かな体力向上施策を推進していく必要がある。

関連する施策

事業名	所管課	概要・主な取り組み
「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」及び「5歳児の体力・運動能力、生活・運動習慣等調査」	指導課 子ども支援課 学務課	全国の児童・生徒及び、東京都の調査と併せ本区の幼児の「体力・運動能力及び生活・運動習慣等の実態」を把握・分析することにより、幼児・児童・生徒の体力・運動能力等の向上にかかわる施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
コーディネーショントレーニングの推進	指導課	幼児期から運動に親しみ、自ら体力を高めていく習慣を身に付け、生涯にわたり心身の健康を保持増進することができる資質・能力を育むため、区内の全学校（園）にてコーディネーショントレーニングを行い、多様な運動への意欲と体力の向上を目指す。
特色ある教育活動	指導課	教育機関・企業・NPO法人等が集積する千代田区ならではの特色を生かし、地域の人材及び専門家等を指導者として招聘するなどにより、「体力向上」や「スポーツに対する興味・関心」を高め、創意工夫を凝らした特色ある学校及び園づくりを推進する。

令和7年度実施施策の成果及び今後の施策の方向性

千代田区立学校（園）では、令和4年度より全ての学校（園）においてコーディネーショントレーニングに取り組んでいる。「令和7年度 実技調査項目の結果」より、小学校5年生においては男女ともに「反復横とび」の結果が他の結果と比較し大きく上回っており、敏捷性を図る反復横とびの結果の向上として、コーディネーショントレーニングの取組の一定程度の成果として、表れていることが伺える。

また、各学校（園）では「特色ある教育活動」の中で、子どもたちの基礎体力の向上や「スポーツに対する興味・関心」を高めることに取り組むとともに、体育・健康教育の成果を客観的に把握する手段として、全国体力調査を活用している。令和4年度から令和7年度にかけての全国体力調査の結果を見ると、本区の小学校5年生においては男女ともに、体力合計点について概ね全国平均を上回るか、近い水準を維持しており、特に、小学校5年生男子については、4年間を通して全国平均を上回る値を維持しており、小学校段階においては一定の成果が見られた。

一方で、中学校2年生については、男女ともに体力合計点が全国平均を下回る状況が続いており、小学校段階と比較して体力水準に差が見られた。

今後の方向性としては、引き続きコーディネーショントレーニングの取組を推進し、多様な運動への意欲と体力の向上を図るとともに、本区の課題としている「20mシャトルラン」及び「持久走」等の全身持久力の向上に向け、体育・健康教育推進委員会等において検討を重ねる。また、こうした状況を踏まえ、今後も全国体力調査の結果を活用し、児童・生徒の体力状況を継続的に把握・分析するとともに、基礎体力の向上に向けた取組を推進していく必要がある。

（１）子どもの権利推進

《 評 価 》

アンケート調査、ワークショップ、生成ＡＩによる分析を組み合わせ、子どもの意見を政策形成へ反映しようとする取組は、子どもの権利推進の観点から先進的な実践であり、高く評価できる。特に、高校生の約４分の１に子ども部屋がないという結果は、千代田区の住宅事情を反映した特徴的なデータであり、中高生の居場所づくりの必要性を裏付ける重要な知見となっている。

また、子どもの意見を「聞く」ことにとどまらず、その結果を具体的な施策へ結び付けようとしている点も評価できる。さらに、子どもが自ら意見を表明し、その意見が行政に反映される経験そのものが、自己肯定感や主権者意識、社会参画意識を育む教育的意義を持つことも重要である。生成ＡＩによる分析は有効な手法であるが、自由記述に込められた背景や思いについては、人による丁寧な読み取りを併せて行うことで、より質の高い施策形成につながるものと考ええる。

《今後の取組み》

子ども部屋がない背景については、住宅事情だけでなく、家庭の教育方針や生活実態なども含めた質的な分析を進めることが望まれる。その結果を踏まえ、中高生が安心して学び、交流し、相談できるサードプレイスの整備を進めるに当たっては、先進事例も参考にしながら、学習・交流・相談・休息など複数の機能を備えた施設づくりを期待したい。

また、保護者から求められている大人の見守り機能や地域との交流機能も取り入れ、安全で継続的に利用できる運営体制を構築することが重要である。さらに、子どもの権利教育については、リーフレットの配布だけではなく、ヤングケアラーや虐待、ネグレクト等の課題とも関連付けながら、子ども自身が自分の生活や権利として理解できる授業や特別活動の充実を図ることが望まれる。

(2) ちよだリテラシー教育

《 評 価 》

千代田区がリテラシー教育を区全体の重点施策として位置付け、教育課程へ体系的に位置付けながら推進していることは高く評価できる。情報モラルや SNS 上での適切な発信については一定の成果が認められ、生成 A I、新聞教材、読解力向上ワークシート等を組み合わせた取組も先進的である。

一方で、アンケート結果からは、情報の真偽を見極める力、事実と意見を区別する力、複数の情報を比較・吟味して自分の考えを形成・修正する力には課題が見られ、特に中学校段階で数値が低下する傾向が確認された。リテラシーは知識だけでは身に付かず、継続的な学習と実践を通して育成されるものである。教科横断的な取組は評価できるが、それに加えて情報そのものを教材とした直接的な学習機会を確保し、児童生徒が具体的な事例を通して考え、判断する経験を積み重ねることが重要である。

いずれにしても様々な状況を考慮したうえでのリテラシー教育をされていることがわかる。今後はさらに実践事例をもとにした内容やより体系立てた内容の精査を進めることを期待したい。

《 今後の取組み 》

実際のインターネット記事や SNS、生成 A I の回答を教材として比較・検証し、発信者、根拠、引用元、信頼性などを多面的に判断する授業を一層充実させていきたい。総合的な学習の時間に加え、国語、社会、理科など各教科でも継続的に扱うことで、知識と実践を往還する学習が期待できる。

また、地域調査やインタビュー、図書館・博物館での調査など実体験を伴う学習を組み合わせることで、A I では代替できない主体的な思考力・判断力・表現力を育成できる。

これらの学びは A I を利用するための基礎的な学習方法であり、これらを A I との学びとのバランスで考える必要がある。

さらに、リテラシー教育を個別の教育課題として追加するのではなく、探究学習や情報活用能力を支える基盤的資質・能力として教育課程全体の中で体系的・継続的に育成していくことを期待する。特に探究学習においては様々な可能性が考えられ、今後さらに充実したカリキュラムを計画する必要がある。

(3) 九段中等教育学校におけるICT教育

《 評価 》

九段中等教育学校におけるICT環境整備と生成AI活用は全国的にも先進的であり、教育・校務双方で計画的かつ効果的に活用されていることを高く評価する。授業では、生徒が主体的に端末を活用しながら、自ら調べ、考え、協働的に学ぶ姿が見られ、教員もAIを単なる効率化ではなく思考を深める学習ツールとして位置付けていた。

見学において通常の授業でもタブレットを使いこなしており、道具として十分活用している場面を見ることができた。生徒同士の対話もあり、ICT活用をバランスよく行っていることがよくわかった。一方、情報の選択授業では少数の生徒がプログラミングを行っており、より高度な内容を習得できる環境が整っている。より多くの生徒がプログラミングまで興味をもてるとより高度になるのではないかと思った。

また、生徒自身がAIの誤情報や依存の危険性を理解し、ファクトチェックや自分で考えることの重要性を認識している点も大きな成果である。ICTを積極的に活用しながらも、基礎・基本を大切にした授業づくりを継続していることは、今後の学校教育のモデルとなる実践である。

《 今後の取組み 》

ICTや生成AIの活用をさらに推進するとともに、教科の原理・原則や基礎・基本を全員で学ぶ授業を引き続き重視していただきたい。まず教科書や資料、実物観察や実験・制作など直接体験を通して基礎を理解し、その上でAIを活用して思考を広げる学習過程を大切にすることが望まれる。

プログラミングをどの授業でどこまで教えるのかは今後の教育において考えるべきポイントではないかと感じた。活用することはかなりのレベルまで到達していると思うので次なる課題かもしれない。

大学教育では、AIだけで作成したレポートは学習内容が定着しにくいという知見も示されており、学校段階では自ら調べ、まとめ、説明する経験を十分保障することが重要である。AIを利用した成果についても、自分の言葉で説明・議論できることを重視した評価を工夫し、概念理解や探究的な学びにつながるICT活用へ一層発展させることを期待する。

ICTやAIの活用は今後も発達段階や教育課程のそれぞれの段階でどのように進めていくのか全体の流れを考え構想していくことが必要である。

(1) 子どもの権利推進

《 評 価 》

千代田区では、すべての子どもが自分らしく安心して過ごせる環境づくりを目指し、区のホームページを通じて「子どもの権利」の周知を図っている。イラストを多用して視覚的にわかりやすく解説した「子どもの権利に関するリーフレット」を、小学生向けと中学生以上向けに分けて作成・配布している。このことは、家庭や地域で子どもの権利について話し合い、考えるきっかけを提供してきたと言える。

こうした流れをベースに、千代田区教育委員会では子どもの意見聴取や施策反映に係る取り組みとして、「子どもの居場所」をテーマに区内でアンケート調査を実施し、A I 分析により子どもたちの潜在的ニーズ等を可視化することでエビデンスに基づいた適切な施策展開を目指している。千代田区教育委員会がA I 分析等を活用し、子どもの「居場所ニーズ」をいち早く施策に反映させようとした取り組みは先進的で素晴らしい第一歩である。

こうした意見聴取やA I 分析に基づき、子どもが安心感を得られるプラットフォームとしての「多様な選択肢を持つ居場所」の開設が進むことは、放課後を一人で過ごす子どもの孤立感を防ぐセーフティネットとなり得る。子どもの権利を推進する千代田区教育委員会にとって、子どもの意見を聞き、子どもが必要とする「子どもに関する施策」の具現化を図ることは、「子どもをまんなかに置いた教育行政」の取り組みとして大いに評価したい。

《今後の取り組み》

子どもから区への意見発信については、学校で日常的に使うタブレットに匿名で気軽にスタンプや一言を投函できる「仮称・子どもの声ポスト」アプリを導入してはどうか。本区ではA I での集計や自動分析が可能であり、様々な展開・応用が期待できる。また、意見を出しやすくする工夫としては、テキストだけでなく、イラストや「不満足・満足」の感情メーター、選択クイズなど、非言語でも表現できる多面的な窓口を設けることで、多様な子どもたちへの配慮ともなろう。もう一つ大切なのは、「自己効力感」を実感させることである。「みんなの意見でこう変わった！」をアニメ等で子どもたちにフィードバックする必要がある。

今後、子どもの意見を聴取することで、区として考慮すべきことは、早期の『ガイドライン』の検討・整備である。例えば、子ども目線で考えると以下のような点への配慮が必要ではないか。

①集まった意見に対し、区（千代田区教育委員会）がどのように検討し、なぜ実現できないのか・見送りにしたのかの「フィードバックの期限と方法」を明確にする。

②不登校や外国籍など、声をあげにくい子どもの意見をすくいあげる方策を明文化する。

③子どもの個人情報保護と意見表明による不利益が生じさせないためのセーフティガードを確立する。

④子どもを対等なパートナーとして尊重するマニュアルを作成する。

こうした点を整備することで『ガイドライン』を機能させていってほしい。

（２）ちよだリテラシー教育

《 評 価 》

千代田区教育委員会は、全国に先駆けて「ちよだリテラシー教育」を教育課程に位置付け、体系的な情報リテラシー教育を推進している。特にメディアリテラシーの育成に力を入れており、情報を「そのままのみにせず」に一度立ち止まって考える「批判的思考・クリティカルシンキング」の育成に力を入れている。また、千代田区子育て・教育ビジョンにある『情報を読み解き自己の信念に従って行動ができる人』の育成を目指し、国語科での言語能力の習得や読書活動、情報モラル教育、ＡＩ体験などを各学校で展開するとともに、実際のフェイクニュース事例を用いたメディアリテラシー授業など、実践的かつ属人化させない千代田区教育委員会主導のカリキュラムが構築されている。

注目すべきは、児童・生徒を対象に令和７年５月に実施したリテラシー能力の「実態調査アンケート」である。調査項目の「ネット上で発信するときは相手を傷つけない」「自分の行動が周囲にどのような影響を与えるか考え、迷惑をかけるようにしない」「同じ立場でも発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる」で、比較的高い数値を示している。インターネット上での他者への配慮や、自身の行動が社会に与える影響の理解についてある程度の達成度が示され、自己防衛やマナーに関する意識が定着していると言える。ただ、一方で同調査から、子どもたちは「情報の出所や時期を確認する重要性」を認識しているものの、「確かな情報を見極める力」や「事実と意見を区別する力」、「批判的に読み解く力」が依然として課題であり、千代田区教育委員会として実態調査の分析を丁寧に行い次のステップに進もうとしている。

《今後の取組み》

千代田区教育委員会は令和7年の実態調査の分析から、令和8年は以下の方向性で取組みをさらに加速・深化させている。

- ① 区独自のメディアリテラシー検定及び教材開発
- ② 小学校高学年から授業で生成A I を活用
- ③ 読解力向上ワークシートの導入
- ④ 子ども新聞、中高生新聞の配架

こうした取組みにより、「ちよだりテラシー教育」が推進され、メディアリテラシーの育成が図られることを期待したい。今後、千代田区教育委員会としては、個々の教員の裁量に依存しない体系的な仕組みを高度化させ、子どもたちが高度情報化社会を主体的かつ安全に生き抜くための「生存戦略」として、全国に先駆けた情報リテラシー教育のロールモデルを確立していったほしい。

(3) 九段中等教育学校におけるICT教育

《 評 価 》

千代田区立九段中等教育学校は、文部科学省から「リーディングDXスクール」および「生成A I パイロット校」に指定されており、先進的かつ安全なICT教育環境を構築している。1人1台の端末環境に加え、全校生徒（中学1年から高校3年）が日常的に使える校内専用の安全な生成A I ツール「otomotto（オトモット）」を独自開発・導入している点が最大の強みである。

A I 初心者である私が、本校の生成A I 「otomotto」活用の有効性を確認したのは、校内での効果的なプロンプト（A I への指示文）を共有・蓄積していることである。本校専用の生成A I ツール「otomotto」を利用することで、一部の得意な人だけでなく、学校全体の教員や生徒が「A I の賢い使い方」を自然と身につけ、教育の質や業務の効率を底上げできる仕組みを作り上げようとしている。

本校では令和6年に独自生成A I 「otomotto」を開発・導入し、令和7年度に運用後の教員向け及び生徒向けのアンケートを実施し、活用効果や生徒の声をまとめている。

教員向けアンケートから、教員にとって生成A I 導入のメリットは、単に「作業が楽になった」という省力化に留まらず、「事務処理やデータ分析の時間を削ることで、教員が生徒と向き合う時間を生み出した（業務の高度化）が挙げられており、教員の働き方改革の一助ともなりうるツールであることがわかる。

一方、生徒向けアンケート結果から、生徒は生成A I を「思考を代替するツ

ルではなく」、「思考を支援・拡張するツール」として位置づけ始めていると分析されており、単に「便利になった」というだけでなく、生徒の「主体的・対話的で深い学びを補完するツール」として機能し始めていることがわかる。

こうした本校の先進的なA I 導入は、校長の強力なリーダーシップと教員の弛まぬ努力の賜物である。校長は文科省のパイロット校指定を機に、安全な校内独自のA I 環境の構築を迅速に行ってきた。これに応じて、教員は研修を重ねプロンプトの工夫や授業での「壁打ち」手法を開拓してきた。A I のメリットだけでなくコピペ等の課題を見据えた「A I リテラシー教育」を検討するなど学校組織一丸となった実践が行われてきたことが分かる。

《今後の取組み》

今後は、目的や状況に応じて生成A I 「otomotto」とのやり取り（対話の微調整）をさらに高度化させ、生徒一人ひとりの「個別最適な学び」の質を一層高めていくことを期待したい。また、同校で蓄積された「安全な校内A I 運用」や「プロンプト共有の仕組み」といった実践知は、千代田区教育委員会が区内の小・中学校へ順次導入を進める次世代教育生成A I の基盤となるであろう。本校の実践が地域や全国教育D Xを牽引するロールモデルとして発展することを期待したい。

（１）子どもの権利推進

《 評 価 》

千代田区が子どもの意見を施策に反映する取組みを進められたことは、子どもの権利を尊重する社会の実現に向け大変意義深く高く評価したい。また調査結果から実態を把握し、子どものサードプレイスを地域団体と連携して検討していくという方向性も、子どもの意見の実現や社会全体で子どもを育てる機運の醸成の面から価値のあることと考える。

また、今回のアンケート調査において、デジタルネイティブ世代であっても双方向の直接的なコミュニケーションを求める子どもたちが一定数いるという結果は、今後の取組みへの示唆となると思われる。実際、ワークショップは、他者と話すことで「考えがまとまって発信できた」「意見を言語化できた」などの声が寄せられるなど、子どもの意見表明を支える取組となっていることが分かる。子どもたちが心理的安全性の下で他者と語り合い、自分事として意見を形成し表明していく経験は、子ども自身が社会の一員として考え、参画していく力を育む貴重な学びにもつながる。さらに、子どもの意見を聴くための職員の研修の実施やガイドラインの作成などが進められていることも、今後さらに取組みを深めていくための具体的な方策として重要なことである。

《今後の取組み》

今後は、自分からは意見を上げにくい子どもたちの思いも丁寧に寄り添う視点も大切にしたい。また生成ＡＩによる分析は全体像を把握する上で有効であるが、自由記述に込められた子どもの思いや背景を、大人が読んで実感として理解するシステムも大切にしたい。

子どもが安心して自分の思いを表現できる環境づくりとして、年齢の近い大学生サポーターの活用や学校など日常生活の場で対話を重ねることも、多様な子どもの考えを理解する上で有効であると考えます。また幼児教育の先進的な取組みをしているイタリアのレッジョ・エミリア市では、幼児であっても市民として意見表明をする取組も行われており、幼児期から発達段階に応じた方法で表現する機会を積み重ねていくことも必要ではないか。

子どもたちから「どのような意見があり、どのように施策へ反映されたのか」を丁寧に伝え続けるとともに、自分たちの声により地域や社会を変えていけるという経験を通し、子ども自身の育ちを支える教育的な営みでもあるという視点を今後も大切にしていきたい。

(2) ちよだリテラシー教育

《 評 価 》

児童期から青年期にかけては、直接体験や人との関わりを通して、自ら考え、迷い、試行錯誤を重ねながら自己を形成していく重要な時期である。だからこそ、SNSや生成AIが急速に普及する中、「情報を読み解き、自己の信念に従って行動できる人」の育成を目指すちよだリテラシー教育は、これからの時代に不可欠な意義のある取組みであると考えます。「育成する力」を整理し、各学校の教育課程に位置付けて推進していること、さらに実態調査により児童・生徒の現状把握を行っていることを高く評価したい。

調査結果では、情報モラルや他者への配慮などへの理解は高い水準で身に付いている一方で、情報の信頼性を見極める力や、事実と意見を区別する力、批判的に読み解く力、自分の考えを形成・発信する力などには課題があることが示されている。特に中学生になると自己評価が低下する傾向がみられるが、これは情報社会の課題や判断の難しさを深く自覚し始めた結果とも考えられる。

こうした課題を把握した上で、令和8年度からリテラシー検定や読解力向上ワークシート、生成AIの適切な活用など具体的な改善策を講じようとしている点も、先進的な取組みである。今後も子どもの実態を捉えながら、柔軟な実践に取り組んでいかれることを期待する。

《今後の取組み》

ICTや生成AIが主体的に学習する効果を高め、自己形成を支援するツールとなっていくために、今後の取組みとして示されている5つの柱を着実に推進することが重要である。その際、子どもたちが自ら問いをもち、考え、友達と意見を交換しながら協働的に学ぶ経験を引き続き積み重ねてほしい。地域での調査活動やインタビュー、体験的な学習など、実社会との関わりを通して情報を収集・検証する探究的学習と関連付けながら、課題を自分事として捉え、自分の考えを形成し深める過程を一層充実させていくことを期待したい。

(3) 九段中等教育学校におけるICT教育

《 評 価 》

九段中等教育学校は、文部科学省の生成AIパイロット校及びDXハイスクール指定校として、学校独自の生成AIシステム「otomotto」を開発・活用するとともに、探究学習と結び付けながら先進的な教育実践を進められている。AI時代に必要な資質・能力の育成に取り組み、区全体のICT教育を牽引する役割を果たしており、授業風景にも生徒同士や生徒と教師の自由な対話が感じられ、主体的・協働的に学ぶ雰囲気が感じられたことは印象的であった。

また、生徒へのアンケート調査では、生成AIの利便性を感じる一方で、「情報の真偽や信頼性の判断の難しさ」や「生成AIへの依存による思考力の低下への不安」などが具体的な言葉で示されており、それを生徒自身が自覚しているところに大きな意味があると感じている。だからこそ生成AIの活用の工夫について「まずは自分で考える」「ファクトチェックを行う」「AIの回答を自分の言葉で表現し直す」といった回答があげられ、生成AIの情報を鵜呑みにするのではなく、主体的に考えて活用しようとする姿勢が育まれていることがうかがえ、リテラシー教育の成果が表れていると評価したい。

《今後の取り組み》

中学生から高校生へと発達が進む中で、「事実と意見を区別する力」「確かな情報を見極める力」など、生成AIの特性を理解し適切に活用する力を段階的に育成していくことが必要である。自己の考えをさらに深め広げていくことを繰り返しながら「自己の信念に従って行動できる」力や態度を育成していくことが大切である。生成AIが、情報提供や要約、添削、助言などを行うことができる時代だからこそ、教師には、生成AIでの学習を支援するとともに、多様な考え方との出会いや他者との対話を通して、子どもが自分なりの価値観や生き方を形成していく過程に寄り添う存在として、その専門性と指導力を一層発揮していかれることを期待する。

九段中等教育学校で蓄積された生成AIやICT活用の実践成果を検証し続け、区立小・中学校に共有することで、千代田区全体のリテラシー教育の向上に寄与していただきたい。

（１）子どもの権利推進

《 評 価 》

子ども 671 件・保護者 1,020 件のアンケートにワークショップを組み合わせ、さらに自由記述を生成ＡＩ（Talk to the City）で分析するという、定量・定性の両面から子どもの声を多面的に汲み取る試みを高く評価する。特に、大量の意見を政策検討に接続するための生成ＡＩの試行活用は先進的であり、「こどもまんなか」の趣旨に沿うものである。

自宅以外に落ち着ける場所を持たない子どもや、年齢が上がるほど子ども部屋を持たない子どもが増えるという、都市部特有の課題が具体的に可視化された点も意義深い。

《今後の取組み》

１）居場所づくりについては、子ども部屋を持たない家庭が多い都市部の実態を踏まえ、駅近など利便性の高い場所に、一人でも安心して過ごし学習できる中高生の居場所を整えることが有効である。地方の駅前再生（旧商業施設の図書館・交流拠点化）には参考になるノウハウが多い一方、トラブル防止の観点から大人の見守りは不可欠である。

２）意見聴取にとどまらず、高校生自身を委員等として区政に参画させる仕組みを検討したい。東京都の子供・子育て会議で子供・若者委員の公募に多くの応募があり、熱意ある参加を引き出せることが示されている。

３）生成ＡＩの活用を一段進めることを期待する。完成された分析資料を外部に委託して受け取る「静的・代替的」な使い方にとどめず、生データを保持して随時問い合わせ、他自治体のデータと比較・仕分けするなど、インタラクティブで「拡張的」な分析へと視野を広げる余地がある。

（２）ちよだリテラシー教育

《 評 価 》

こうした取組を行う自治体はまだ少なく、現代的な課題に正面から取り組み、成果も表れている点を高く評価したい。特に、メディアリテラシーを入り口として令和７年度から体系的に着手し、実態調査によって課題を数値で可視化できている点は意義深い。

調査からは、情報モラルや相手への配慮は高い水準で定着している一方、「事実と意見の区別」「批判的な読み解き」「情報の信頼性を見極める力」といった高次のリテラシーはさらなる努力が必要と思われる。

《今後の取組み》

これら高次の力は、メディアリテラシーとして教えれば正答率が上がるという性質のものではなく、総合的な経験・知識と、問題解決・探究活動の繰り返しの通じて育つものとする。個々の〇〇教育としてではなく、それらを支える「探究基礎・問題解決基礎」なども含むリテラシーとして全体を貫く設計が求められるのではないかと考える。

「見方・考え方」もキーになる一つだと思われる。教科固有の見方・考え方にとどまらず、世の中を読み解く見方・考え方をリテラシーとして育てる視点をもてれば、例えば、初めて出会う情報でも真偽やパターンを判断できるようになる。

(3) 九段中等教育学校におけるICT教育

《評価》

1人1台端末、独自の生成AI「otomotto」、文部科学省の生成AIパイロット校・高等学校DX加速化推進事業の指定など、全国的にも稀な水準でICT環境と実践が整備されている。国語等の指導案や視察等を通して教員の熱意と力量の高さがうかがえ、高く評価したい。ICTの安全で批判的な活用の土台づくりが進められている点も評価できる。

《今後の取組み》

「生徒にどのような力をつけるべきか」から発想する議論が重ね、単に今の授業の改善に留まらない本質的な改善があることを期待したい。それらを実現する人材と環境は本校に備わっていると考えている。

入試に代表される「見える学力」は、AIが代替しうる領域でもある。その先の「概念的理解」は体験や議論等を通じて一人一人の中に構成される、AIに奪われない理解のレベルを目標に据えたい。